

日本語学習者による用例を通時的観点で分析可能とする

コーパス開発の意義とその可能性

上出 大河 (國學院大學大学院文学研究科) †

The Significance and Potential of Developing a Corpus to enable Diachronic

Analysis of Usage by Learners of Japanese

Taiga Kamide (Graduate School of Literature, Kokugakuin University)

要旨

日本語非母語話者(日本語学習者)による用例を収めたコーパスは現在「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(International Corpus of Japanese as a Second Language: I-JAS)等数種が存在している。それらはいずれも共時的な誤用分析、中間言語分析を行う際には有効である一方、通時的な観点から分析を加えようとする際にはその採録対象の时期的な偏りのためにある種の困難が付きまとうこととなる。そこで本発表では、このような問題を発展的に解消する手がかりとしてのコーパス開発の意義、可能性について少しく記述することとしたい。

1. はじめに

日本語母語話者の用例を採録対象としたコーパスと日本語非母語話者(日本語学習者)の用例を採録対象としたコーパスとの間に見られる最大の質的差異のひとつは、通時的な分析可能性の有無である。

日本語母語話者の用例を採録対象としたコーパスは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)のように用例の共時的検討を可能とするコーパスや「日本語歴史コーパス」(The Corpus of Historical Japanese: CHJ)のように用例の通時的検討を可能とするコーパス等が整備されている。しかし一方で、日本語非母語話者(日本語学習者)の用例を採録対象としたコーパスは、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(International Corpus of Japanese as a Second Language: I-JAS)をはじめ「中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス」(Corpus of Japanese as a Second Language :C-JAS)、「学習者作文コーパス なたね」等総じて通時的な検討を加える上では多大な制約を受ける性質のものが多数である。むろんこれらのコーパスは共時的な誤用分析、中間言語分析を行う上では有効であり、日本語非母語話者(日本語学習者)の犯しやすい言語的誤り等を考察しうるという点で高く評価しうるであろう。他方、日本語教育がその歴史的な営みを内省し今後の教授法を模索していくという上では、明治期に遡る日本語教育の萌芽的開始点に見られた用例も含めた通時的分析も重大な示唆を与えうるものではなかろうか。日本語非母語話者(日本語学習者)による用例を通時的観点

† y 224206@kokugakuin.ac.jp

で分析可能とするコーパスの開発は、現在のコーパスの部分的な問題点を発展的に解消し、このような方向付けでの研究を進展させる上で極めて重大な意味を有するというこのことをまず指摘しておきたい。

2. コーパス開発の意義

以下、日本語非母語話者（日本語学習者）による用例を通時的観点で分析可能とするコーパスが日本語教育の実践や言語研究を進める上でどのような意義を持ちうるのかという点について簡略的に記す。

2.1 学習者の言語習得上の通時的な難点の理解の促進

現在利用されている日本語非母語話者（日本語学習者）による用例を採録対象としたコーパスの整備が現代の誤用分析、中間言語分析に大きな研究上の進展をもたらしたのは周知の通りである。一方で、現在の分析の多くが共時的な分析にとどまっているために、それらの分析が総じて通時的視点を欠いたものになっていることは重く受け止められるべき事実である。ここに通時的視点を持ち込むことが容易になれば、学習者の音声的、文法的特性が通時的な連続性を有する特徴であるのか否か等が明らかになり、より重点を置くべき指導項目を絞り込むことが可能になることが期待される。また、通時的な分析で明らかに知る学習者の音声的、文法的特性の連続性及び非連続性については、2.2 に示す教材・教具の有効性の検証や 2.3 に示す日本語史的な分析可能性にもつながりを有するという点を申し添えておきたい。

2.2 教材・教具の有効性の検証可能性

日本語教育史領域での研究では、教授法、教材・教具の歴史的変遷等が研究上の関心の中心とされることが多く、資料に基づいた実証的な議論に耐えうる論が多数発表されている。これらの研究上の成果と、2.1 で言及したような学習者の音声的、文法的特性の連続性、非連続性とを併せて考察することで、その時期に中心的に採用されていた教授法、教材・教具がどのような言語上の性質を産み出したのか、そこに関連性が見出せるのか否か等を実証的に検討することが可能となり、日本語教育史領域に更なる知見の蓄積をもたらすものと期待される。ここに指摘するまでもなく、言語教育の最重要事項は学習者の言語習得のサポートであり、学習者の言語習得の実態を無視して教授法や教材を分析することはとりもなおさず言語教育の最重要事項を無視する態度に他ならない。しかし、歴史的な用例を採集し分析することは現状では多くの労量を費やす必要があり、また、網羅性や量的な妥当性を考えれば調査の困難であることは明白であり、このような現状の解消にはコーパス開発による用例調査の安定的な容易さの担保が必要であると思われる。

2.3 日本語史的な分析可能性

日本語非母語話者（日本語学習者）による用例を通時的観点で分析可能とするコーパスには、歴史的な用例として明治期、大正期の植民地政策の実践に伴う領有地での用例を採録する必要がある。この時期の台湾や朝鮮での用例は日本語非母語話者の日本語というだけではなく国家政策的道理上は皇民の国語という性質を有している。このような特殊事情に着目するにせよ無視するにせよ特定の言語は母語話者の専有物たりえないのであって、一定の歴史をもつ非母語話者の日本語も日本語史領域の一環として論じられる資格を有してい

るはずである。また、領有地にはそれぞれ内地方言の影響が見られるため、方言の展開の一側面としての分析も用例に研究用情報を付加すること等で進展していくものと期待したい。

その他にも日本語非母語話者（日本語学習者）による用例を通時的観点で分析可能とするコーパスはその史的立場のために歴史学や教科教育史領域等でも援用が可能となる可能性があり、その価値は極めて高いものと思われる。

3. 採録対象について

言語資料としてどのようなものを採録対象とするかというのは重大な問題である。現在利用されている日本語非母語話者（日本語学習者）による用例を採録対象としたコーパスとはその制約という面で隔たりが否定できない。最大の難点は録音資料の不足である。当時の内地人による音声的な報告の例を網羅的に採録することでこの問題を部分的に補うことができるかどうかは議論の余地があろう。

このような制約を考えると、当時の外地系児童の作文資料が採録対象としては大きな意味を持つ。作文資料としては以下のようなものが挙げられる。

<作文資料>

- ・新義州高等普通学校作文集『大正十二年伝説集』（1923年）
- ・『御大礼記念児童文集』（1929年）
- ・『全国小学児童綴方展覧会』（1936年）全6巻 等。

他にもガリ版刷りの作文集等を含めると、コーパスとして機能しうる最低限度の言語量は確保できるものとみてよいのではなかろうか。

作文資料も他者の手による規範化がなされている可能性があり、当時の外地人の言語状況が正確に反映されているのかという点で疑問が残る部分が存在する。この点については資料の質的な妥当性について検証した上で採録対象を選定する必要があるが、例えば『全国小学児童綴方展覧会』には「オカアサ」（「オカアサン」）、「イツツテ」（「イッテ」）というような誤記が分布の上で外地系児童に偏っており、その他方言要素の表出等を踏まえると、ここに見られる作文は過度に規範化されたものではないことが期待されるため、一定程度は言語状況を反映していたものと見られる。

音声に関しては、先述の事情で内地人の報告の観察に依存せざるを得ないが、これに関しては領有初期から比較的豊富な蓄積が存在し、量的な問題はクリアできそうである。

<内地人による音声上の報告に関する資料>

- ・山口喜一郎(1903) 「国語教授の際に気付きし児童発音の誤りに就きて」(『台湾教育学会雑誌』十七号)
- ・官立漢城外国語学校(1911) 『国語の発音及語法に関する調査』
- ・寺川喜四男(1939) 『北部台湾に於て福建系本島人の使用する国語のアクセント研究』 早稲田大学言語学会
- ・————— (1942) 『台湾に於ける国語音韻論』 台湾学芸社
- ・————— (1945) 『大東亜諸言語と日本語』 大雅堂 等。

その他、雑誌「日本語」、「音声学協会会報」等にも広く報告が見られる。

このような内地人の観察にどの程度の妥当性を認めるのかという問題は、コーパス採録の対象となりうるか否かという問題と地続きであり、多面的な角度からの検討を行う必要がある。

4. まとめ及び＜日本語非母語話者の日本語史＞研究について

以上、日本語非母語話者（日本語学習者）による用例を通時的観点で分析可能とするコーパスが整備されることで容易になると思われる研究の重要性やコーパス開発の可能性について簡略的に述べてきた。このようなコーパスを用いた分析の成果は、それを日本語教育学領域に位置づけるか日本語学領域に位置づけるかはさておき、いわば＜日本語非母語話者の日本語史＞研究とでも呼称すべきものであろう。この方向付けの研究の成果は純粋な言語学的分析の対象としても興味深く、また日本語教育がいつかきた道を繰り返さぬための道標としても重大な示唆を与えるものである。

現代の研究状況を眺めれば、母語話者の日本語のように非母語話者の日本語が通時的な分析を加えられることは僅少であり、日本語教育史領域ですら用例の通時的分析は充分行われていないと言わざるを得ない。少々事々しい例になるが、ソシュールは「記号学」の方向性を表明する際に、「それはまだ存在していないのであるから、どんなものになるかはわからない。しかし、それは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。¹⁾」と述べた。「記号学」の誕生ほどに重々しく華々しい事柄と位置付けるわけではないが、その重要性を踏まえれば、＜日本語非母語話者の日本語史＞研究も存在する権利を有しており、その地位はあらかじめ決定している、と主張しておきたい。

また、より多くの人々と問題意識を共有し、協力を得ながらそのような研究の進展をもたらさうとするコーパスの構築を目指すことを発表者の今後の課題とする。

¹⁾ Ferdinand de Saussure, Cours de linguistique Générale, 1916 (小林英夫訳『一般言語学講義』1972年、岩波書店、p 29)